性格表現用語に使われる“気”の研究

京都大学 濱 野 清 志¹

A study of the word “*ki*” used in personality trait names

Kiyoshi Hamano (*Department of Educational Psychology, Faculty of Education, Kyoto University, Sakyo-ku, Kyoto 606*)

Since there are so many Japanese personality trait names, which include the word “*ki*”, it is plausible that these expressions reflect the characteristics of the way the structure of the personality is grasped by the Japanese. The purpose of the present study is to reveal those characteristics viewed through the word “*ki*” by means of factor analysis. Forty male and 31 female six-year-old children were rated by their preschool teachers with regard to the 25 personality trait names using the word “*ki*”. Factor analysis with varimax rotation yielded following four factors: “*ki*” was regarded as (1) changeable material. Our personality was metaphorically seen as having this “*ki*” within it and basically changeable. (2) Attention toward others. Our personality was evaluated by the extent we pay attentions to others. (3) Radio waves between people. Capacity of “tuning in” to others was our characteristic way of evaluating a person. (4) Quantity of psychic energy. In this factor, “*ki*” was thought as metaphorically related to the body.

Key words: personality trait names, Japanese mind, “*ki*”, factor analysis.

ある用語群にある特有の意味を手がかりに、その言葉を使用する人間や社会の特徴を研究する手法はよく使われている。個々の言葉は、その言葉によって表現される思想の資材でしかない。しかし、思想はそれを語る言葉によってしか表現され得ないのである(大野, 1974)。心理学においても、われわれが日本人を対象として研究を進めるかぎり、日本語にある特有の表現に着目することも必要であろう。筆者はこの立場に立ち、本研究では“気”という言葉を取り上げた。“どうも気が散ってだめだ”とか、“あの人は気の利かないところがある”のように、現代日本語で用いられる気は、自分自身や他者についてその心のありかたを表現しようとするときに、欠かすことのできない重要な表現を多く有している。従って、気を媒介にしてパーソナリティを見れば、日本人のパーソナリティの把握様式の特徴の一端が明らかになると思われる。

上記の2つの気の用例に示されるように、気は人格を状態として捉える場合にも、特性として捉える場合にも用いられる。人格は、“対人認知の対象としては構造を持つものとして静的に把握できるものであると同時に、主体的に変容できるものとしてダイナミックな層の構造をもっている”(梅本, 1981, p. 186)と考えられる。気を用いた表現は、このような人格の構造面と層、すなわち特性と状態にまたがって、その種々の側面を表現する

ことを可能にする。気のこういった多面性、柔軟性は、気が日本人の意識に深く根ざした言葉であることを示すものと考えられる。事実、気は、“日本本来の‘け’や‘いき’”と、中国起源の‘気’がむすびつき、‘気’の哲学の影響のもとに宇宙論的な背景をもつものとして洗練されていった”(市川, 1978, p. 125)と考えられるように、単に人格の側面を表現するにとどまらない広がりをもっている。

日本語としての気の研究は、中井(1947)、木村(1969, 1972, 1981)、土居(1971)、赤塚(1974)らによって論考され、外部的、超個人的、雰囲気的なものとして、コミュニケーションを支え、他者を介して自分を捉える重要な契機として気を把握しようとする方向に向かっているとされる。

ところで本論では、気をパーソナリティとの関連において捉えることを目的としている。しかし、これまで心理学者によって論及される場合、気はほとんど人格の状態面において捉えられていた。千葉(1963)の論文もこの観点からの考慮であり、また佐藤(1944)は、気を心身修養という立場から状態像として詳説している。さらに佐藤(1961)は、西洋の伝統的気質論と中国の気の説を比較させつつ、気質を“大部分遺伝的なものであっても身体の調整等によって体質と共にある程度まで変化し得るもの”(佐藤, 1961, p. 20)と考えている。

このようにして扱われる気は、気という言葉とそれによって表現されていると考えられる現象との同一視によ

¹ 本論文をまとめるに際して御指導下さいました京都大学教育学部河合隼雄教授に厚く感謝します。

って展開されていると思われる。気は、気分として個人が幾分か所有すると同時に、個人を越えて天地に満ちるものとして捉えられるため、個人が遺伝的として受動的に受けとらざるを得ない人格の一要因としての気質から、心身修養によってある程度操作しうるものとしての気へと重層的に把握されることになる。この観点から人格を捉えようとするかぎり、気が人格の状態像把握へと向かうのも当然と考えられる。

しかし上述のように気という言葉をそれによって表現されると考えられる現象と同一視することによって、気を実体化していく方向とは別に、気をその指示対象が様々に変化する1つの言語記号とみることによって重点を置く立場も成立する。この立場からみると、気はパーソナリティを構成する1要因として捉えられるのではなく、それを媒体としてパーソナリティを眺めるプリズムのようなものと考えられる。“気を使う人”や“気の多いやつ”と表現する時、われわれはその人間の中に気という実体があり、その気の現象を表現しているのだとは考えない。むしろ、気という言葉の多義的意味空間のぼんやりとした統合性を前提として、そこに反映される“気を使う”といった表現を通してその人のパーソナリティの一断面を眺めていると考えられるだろう。隠喩とは“ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験すること”(Lakoff & Johnson 著 渡辺他訳, 1986, p. 6)とすれば、気はパーソナリティについて語るときの1つの隠喩として働き、その言葉の意味空間に限定されつつ、人格の種々の層を表現することを可能にするのである。そこで、本論では以下、パーソナリティを表現する際に用いられる気の用例に研究の焦点を絞ることとする。

ところで、パーソナリティを表現する用語の研究は、Allport & Odbert (1936) から始まるとされている。特性名辞 trait names という題目から推察されるように、そこでは人格の特性像が焦点となる。日本語でこういった研究は、青木 (1971 a, b, 1972, 1973, 1976, 1979) の一連の研究により精力的に進められている。本論でも、青木の用法にならい、性格表現用語という表現を用いていきたい。青木 (1971 a) は、性格表現用語を適切語、評価語、印象語、状態語、生物学的特徴語などに分類し、その中で適切語を500語あまり選んでいる。適切語とは“一貫した行動傾向を表現できる用語”(青木, 1979, p. 368)である。その前提として、パーソナリティを素朴実在論的に捉え、それを表現する言葉が実在としてのパーソナリティと対応するものであるとしている。パーソナリティ研究にとって、この立場が研究を進める上での前提として有効なものであるとされ、筆者もこの立場で論を進める。しかし、気そのものについては、素朴実在論的に仮定することを差し控え、言語記号の方向へ引き戻して考えたい。その上で、気をパーソナ

リティの現象を特異的に分節するものとし、1つの表現として“気を使う”などのように述べられたとき、上記の性格表現用語としてみなしうるものとする。

ここで本論の目的を簡単にまとめると、気という多義的意味空間を有する日本語としてなじみ深い言語記号を介して、パーソナリティの表現を行うときの気によるパーソナリティの分節構造を明らかにし、遠い目標として、臨床面接場面などでの臨床像記述に有益な観点をもたらしたいということになる。気は元来単一の言語記号であるがゆえに、その様々の隠喩は対象の微妙な差異を明確にする可能性を持つのであり、そこへ至る前段階としてここでは若干きめの粗い分類を試みることにする。

最後に本研究の対象として児童を選んだことについてその立場を述べておく。6歳児はいわゆる前操作期の後半であり、情意的には直観的情意の段階であるとされている(波多野, 1975)。またこの時期は家庭から学校へと移行していく時でもある。このように人格が多様な社会的相互作用や認知的発達によって細かく分化していく以前に、そのパーソナリティを気によって分節するならば、気の方分節構造のより基底的なものが予想されることになるだろう。

方 法

調査の目的 保育園6歳児クラスの児童を保育が気を用いた性格表現によって評定する際、気が人格のどのような側面を反映するものであるか検討することを目的とした。

調査票の作成 気という文字を使用した表現の中から、性格表現用語として用い得るものを選出するため、網羅的に60種の表現を選出し予備調査を行った。この60種は、赤塚 (1974)、木村 (1969, 1972)、土居 (1971) から、自然現象にかかわる気を省いて筆者が抜き出したものである。

予備調査は以下の教示のもとに、心理学専攻の大学院生41名に配布し、35名回収した。教示：“以下に気ということばを用いた60種類の用例があります。この中で、特に個人の性質を言いあらわすことが可能だと思われる用例があれば、その数字を○で囲んで下さい。いくつでもかまいません。”

その結果、各項目につき35名中何人が○をつけたかによって、その%を一致率として高いものから順に並べTable 1に示した。調査票に採用する表現の選択基準は、項目数が少なすぎると後の因子分析の段階で問題になることと、あまり一致率の低すぎるものでは性格表現用語として使えないという点を考慮し、20項目の得られる50%の一致率までとした。さらに、準備段階での不備で、60種の表現に含まれなかったが、性格表現として角川類語新辞典にあがっている“気が小さい”“気が

Table 1
予備調査の気の使用例とその一致率

一致率 (%)	用 例	一致率 (%)	用 例
100.0	気が強い	20.0	気になる
	気が弱い	17.1	気ざわり
	気むずかしい		気にかける
99.3	気の短い	14.3	気味が良い
	気のいい	11.4	気かもめる
	気さくな		気がとがめる
88.6	気ままな		気が楽になる
	気が長い		気が気でない
85.4	気前がいい	8.6	気に入る
	気の多い		気が違う
	気楽な		気抜けした
74.3	気がつく	5.7	気おくれた
	気が利いた		気構え
68.6	気軽な		気がかり
62.9	気をつかう		気をつける
57.1	気ぜわしい		気の悪い
54.3	気をくばる	2.9	気落ちした
	気をまわす		気が重い
51.4	気が置ける		気が沈んだ
45.7	気疲れする		気がふさいだ
	気がねする		気乗り
	気味悪い		気がない
37.1	気に病む	0.0	気がある
34.3	気を持たせる		気がする
	気にさわる		気がすむ
	気にする		気が向く
	気がつまる		気を失う
31.4	気苦労		気が進む
20.0	気が張った		氣勢をあげる
	気の毒な		気が晴れる

荒い”も、項目として採用した。この 22 項目のうち、“気楽な”“気疲れする”“気をつかう”の 3 項目は、観察する側がそのように感じるときと、観察される側がそう感じていると思うときの 2 様に解釈される。そこで、これを明確にするため、それぞれの項目の後に“先生が”と“本児が”とを添え、2 通りに分けて用いることにした。従って、調査票の全項目数は 25 である。

調査票は、各項目につき 5 段階評定とし、また当該の子どものイメージと結びつけやすくするため、“気が強い子ども”のように、性格表現のあとに“子ども”を付加して統一した。さらに、項目の順序効果を排するため、4 種の順序の調査票を作成した。

調査の手続き

対象 神戸市内の 2 つの保育園の園児 71 名（男 40 名、女 31 名、平均年齢 5.8 歳、レンジ 5.3—6.3）。各保育園の内訳は、A 保育園 33 名（男 17、女 16）、B 保育園 38 名（男 23、女 15）である。

評定者 各保育園から保母を 3 名ずつ、対象とする園児の名前を見るだけで、その園児の普段の姿を思い浮かべることができることを条件として選んだ。6 名とも女性であり、経験年数は A 保育園でそれぞれ 3 年、3 年、5 年であり、B 保育園では 7 年、9 年、15 年である。

調査 調査票の右上に園児の名前を平仮名で記入し、A、B 両保育園の対象児分をそれぞれの保母に配布した。その際、以下の教示を文書で手渡し、確認した。調査票は 2 週間後に回収し、翌日回収されたデータのうち、評定者間で極端に差異の認められる項目についてその評定を行うもとなった最も具体的な対象児の行動を各評定者に呈示させ、その特性を推察しなおし再度評定を行った。これは、3 人の評定の食い違いが意味の取り違い、評定基準のずれ等に起因する部分を整えるためである。

教示：“私たちが日常よく用いる表現に‘気’という文字を使ったものが多くあります。その表現する内容は天気のことから人の性格のことまでさまざまありますが、ここでは性格を表わす‘気’の表現について考えてみたいと思っています。日常的でありまた日本的である‘気’の性格表現によって児童を評価することで、何らかの児童の性格の理解につながるものがあるのではないかと考えています。さて、以下に 22 種類の表現を用いて例えば‘気が弱い子ども’というように示してあります。そこで当該の児童を思い浮かべ、先生方が普段からお受けになる印象に従って、その表現に本児がまったくあてはまらない場合には 1 に、ほんの少しあてはまるという場合に 2 に、ややあてはまるという場合に 3 に、かなりあてはまるという場合に 4 に、非常にあてはまるという場合に 5 に、それぞれ記された順に上から○をおつけ下さい。‘気疲れする’‘気をつかう’‘気楽な’の 3 つの表現は、本児に対して先生方がそのように感じられる場合と、本児自身がそのように感じる場合を 2 つに分けておりますので、ご注意下さい。”

結 果

第 1 に評定される側の気焦点を絞るために、評定者間の評定の一致度をケンドルの一致度係数 (Wc) によってそれぞれの保育園で項目ごとに求めた。またその有意水準を χ^2 値で検定した (Table 2)。その結果、両保育園でともに評定の一致度の有意水準に達した項目が 19 項目選ばれた。

Table 2
評定者間の一致度係数

項 目	A 保育園 (N=33) Wc	B 保育園 (N=38) Wc
気ぜわしい	.619**	.809***
気があらい	.693***	.856***
気ままな	.782***	.841***
気をつかう(先)	.453	.690***
気をつかう(本)	.547*	.654***
気の置けない	.809***	.434
気のいい	.479	.658***
気が長い	.769***	.584***
気楽な(先)	.531*	.616**
気楽な(本)	.514*	.637***
気がつく	.771***	.794***
気が小さい	.620**	.622**
気さくな	.500	.657***
気が弱い	.742***	.537*
気むずかしい	.583**	.797**
気軽な	.403	.626**
気の短い	.576**	.724***
気の多い	.659***	.829***
気疲れする(先)	.614**	.650***
気疲れする(本)	.562*	.594**
気がいい	.448	.573**
気が強い	.786***	.592**
気が利いた	.822***	.691***
気をくばる	.884***	.689***
気をまわす	.839***	.603**

注. *は5%有意水準, **は1%有意水準, ***は0.1%有意水準を示す。(本), (先)はそれぞれ(本児が), (先生が)を示す。

ついでこの19項目に関して、3人の評定粗点の平均を各児童の項目得点とした。そしてこの項目を因子分析により群に分類するが、各保育園ごとの分析を行えば個体数が少なすぎて特殊な変動に左右される。そこで、両保育園が非常に近い域にあり、同系列の保育園であることから、園児の母集団を同一のものと仮定し、評定者の保育園間の差を除くため項目得点を各保育園で標準化しておき、全児童まとめてその値で因子分析を行った。因子分析は反復推定による主因子法によって解を求めた。順次の固有値の差をみると、第5因子から値が平板化するので、第4因子までを主要因子とみなした。この4因子での説明率は77.7%である。その後バリマックス回転を行い、回転後の因子負荷量をTable 3に示した。ここでは理解しやすくするため各因子ごとに負荷量の高い

Table 3
バリマックス回転後の因子負荷量

項 目	Factor			
	1	2	3	4
気ぜわしい	.849	.092	-.292	-.022
気があらい	.873	.008	.168	-.192
気ままな	.708	-.412	.199	.078
気の短い	.789	.051	.176	-.081
気の多い	.812	-.243	-.208	-.062
気が長い	-.740	-.049	-.023	.072
気がつく	-.156	.888	-.042	-.244
気をくばる	-.201	.870	-.111	-.199
気をまわす	.303	.817	.019	-.087
気が利いた	-.022	.857	-.228	-.257
気をつかう(本)	-.052	.739	.196	-.003
気むずかしい	.269	-.007	.681	-.083
気疲れする(先)	.253	-.062	.659	.141
気疲れする(本)	-.264	.314	.673	.143
気楽な(先)	.058	.278	-.804	-.061
気楽な(本)	.467	-.044	-.665	-.058
気が小さい	-.047	-.130	.213	.876
気が弱い	-.036	-.252	.155	.815
気が強い	.237	.187	.157	-.767

注。(本), (先)はそれぞれ(本児が), (先生が)を示す。

Table 4
各因子の正方向群と負方向群の性差

		正方向群	負方向群	χ^2 値
Factor 1	男	15	6	7.379*
	女	7	16	
Factor 2	男	13	14	.096
	女	9	8	
Factor 3	男	14	14	.000
	女	8	8	
Factor 4	男	16	8	5.867*
	女	6	14	

注. *は両側検定での5%水準の有意差。

ものがまとまるように配列した。第1因子は“気があらい”から“気が長い”まで、第2因子は以下“気をつかう(本児が)”まで、第3因子は以下“気楽な(本児が)”まで、以下は第4因子の主要項目というように大きく分けてみる事が可能であろう。

次にTable 3の各因子について正方向群と負方向群に児童を分類し、群間での男女比を χ^2 検定し、各因子の

性差を検討した。分類方法は、児童の各因子の因子得点の推定値を求め、数値の大きなものから順に並べて全体 71 名のうち上位 22 名を正方向群、下位 22 名を負方向群とした。因子得点の推定値は真の因子得点の最小二乗的推定値である。その結果、第 1 因子と第 4 因子に有意差がみられた (Table 4)。

考 察

初めに Table 2 の評定者間の一致度について考えておきたい。ここでふり落された項目は“気をつかう (先生が)”“気の置けない”“気のいい”“気さくな”“気軽な”“気前がいい”の 6 項目である。“気の置けない”は B 保育園で、残りの項目は A 保育園でのみ有意水準に達していない。その理由として以下のように 3 つ考えられる。

第 1 に評定者の個人差が関係してくる。この点には“気をつかう (先生が)”が該当しよう。しかし同じタイプの項目である先生が“気楽な”と“気疲れする”は有意水準に達している。そこでこの 3 つの表現を比較してみると、“気をつかう”ではその主体が主体的に動いている姿が想定され、一方“気楽な”“気疲れする”ではその主体の周囲の状況に動かされている姿に力点が移行していることがわかる。気は主体にその意志がなければ使う必要のないものである。しかし“気楽”に感じ“気疲れする”のは主体の意志に関わりなく意志を越えた所で感じられるものである。従って先生と児童との間にある力点は前者では先生の側に、後者ではより児童に近いところに置かれていることになる。そのため、“気をつかう (先生が)”の項目はより評定者の個人差を表わしやすい項目であったと考えられる。

第 2 に児童を評価対象とした場合の表現の適切性が問題となる。本研究の対象は 6 歳児であるが、予備調査では項目選定時にあえて“児童”ではなく“個人”の性格表現を選出することにした。従って教示には児童という言葉を用いていない。これは、本研究の展望として年齢段階での差異を今後検討していきたいためであった。それゆえ予備調査で選ばれた項目には保育園の先生と園児との関係では不適切なものも混入していたと考えられる。“気の置けない”“気軽な”“気前がいい”などは、いずれも対等な人間関係を前提にした表現と考えられ、保育・園児の関係には不適切だったと思われる。そのため一致度も低下したのであろう。

第 3 に表現内容のあいまいさがあげられる。“気のいい”“気さくな”等は他の性格表現では言い換えにくい独特の表現であるが、かえってその独特さがあいまいさをもたらし、3 人の先生で一貫して捉えられないものとなったと考えられる。

次に抽出された 4 因子について考察する。Table 3 に

示されるように第 1 因子では“気ぜわしい”“気があらい”“気ままな”“気の短い”“気の多い”が正方向に高い負荷量を示し、“気が長い”が負方向に高い負荷量を有している。このグループでは、気を主語として実体化し、その性状を述べる形容詞が続く形が共通していると思われる。“気ままな”も気が“まま”なのであり、思い通りにふるまう気というのが想定された表現である。

そこで気に続く形容語を検討してみると、短い、長い、多い、せわしい等、気を視覚的に捉えその性状、動きを述べているように思われる。あらいは“荒い”にも“粗い”にも通じ、これも視覚的、触覚的に捉えられた気の様子といえるだろう。“まま”も含めてこれらの形容語から考えられることは、気が様なものとしてみることができ、様々に変転するものなのかという点である。それは気の視覚的、触覚的な性状・運動という隠喩を通して把握され、土居 (1971, p. 112) の言う“瞬間瞬間における精神の動きを指す”ものであり“現象の動きそのもの”を表わす気と符合していると思われる。

また第 1 因子の主要な性格表現を青木 (1973) の言い換え語の研究を参照して検討すると、“気があらい”は“おだやか”の反意語、“気ぜわしい”“気の短い”は“悠長な”の反意語、“気が長い”は“怒りっぽい”の反意語としてあげられている。“気の短い”は“のんびりした”の反意語としてもあがっており、総合してみるとここでも平穏で様な動きのないところから、変転しやすく感情の激しやすさを伴った動きの活性化を対極とする軸を想定することができよう。この軸上に第 1 因子の性格表現を置いてみると“気が長い”以外はみな活動性の高い側にあり、土居 (1971) が“気まま”という表現で検討しているような気の快楽原則的方向性がその表現の豊富さによって暗示されていると思われる。気は気候の移ろいやすさに通じ、本質的に変転の方向へ向かうものとして捉えられ、そこから逆に“気を静める”といった表現の意味可能性を開くのである。

第 2 因子の主要な性格表現は、気をそれに続く動詞の対象として捉えることができるという点に特徴がある。“気をつかう”“気をくばる”“気をまわす”がそれであり、“気がつく”は“気をつける”、“気が利いた”は“気を利かす”と表現できる。そこには気を対象として操作するという隠喩が働いており、前提として主体の意識的なのかかわりが想定されると思われる。“利く”“利かす”とは用になかった動きをさせることであり、くばったり、つけたり、まわしたりすることによってあることがらに向けて気をつかうことがこの群の特徴となっている。青木 (1973) によると、“気をつかう”とほぼ同義と考えられる“気使いの多い”の言い換えとして“思いやりのある”“神経質”“おせっかい”“しつこい”“世話をやく”“細かい”“気がつく”があげられ、“気をつかう”

は“遠まわしにいう”“うろたえる”の同意語，“氣をくばる”は“見栄を張る”の同意語，“氣の利かない”は“氣使いの多い”“頭の回転早い”の反意語としてあがっている。これらの言い換え語や反意語を通して推測されるのは、第2因子は主に対人的な注意の働かせ方をあらわしているということであろう。“氣ままな”が比較的高い負荷量を負方向に示しているのも、氣働きをしないですむ楽楽原則的方向性が第2因子の負方向にすべり込んできたものと思われる。

第3因子の主要な表現には“氣むずかしい”“氣疲れする”が正方向への高い負荷量を示し，“氣楽な”が負方向へ高い負荷量を示している。“氣疲れする”“氣楽な”はともに“先生が”“本児が”を含んでおり、これらは一致度の検討で述べたように、主体の意志に関わりなく意志を越えたところで感じとられる雰囲気的なものを示していると思われる。従って評定者と対象児の両方が同一因子に現われるのも当然の結果と言えるだろう。青木(1973)によると、“氣むずかしい”は“つき合いのよい”“氣軽な”の反意語であり，“氣楽な”は言い換え語として“氣軽な”“責任感のない”“なれなれしい”“軽卒”“秩序のない”“適当”“不真面目”“うすっぺら”があり，“出まかせをいう”“やる氣のない”の言い換えとしてもあげられている。また“氣楽な”の反意語には“氣苦労の多い”“氣が重い”“氣づまり”があり，“氣使いの多い”の反意語でもある。この第3因子の氣は“氣が合う”という表現で使われる氣のように、個人と個人をつなぐ波長のようなものとして考えられる。この氣は二者関係の成立と同時にその2人の間にあるものとして把握され、第2因子の氣働きをする以前のものとみることができる。波長が合わない相手は“つき合いの悪い”“氣むずかしい”人間に見え、互いに“氣疲れする”わけであり，“氣が重く”“氣づまり”になる。また、波長が合うと互いに“氣楽”であるが、それが行きすぎると私にとって相手が“なれなれしく”“軽卒”になり“やる氣がない”ようにすら見えてくる。木村(1981, p.191)が“相手側の事情もしくは自分と相手との間柄の事情によってのみ動かされる様子”として想定する氣に近いものといえるだろう。

さらに“氣楽な”の項目は、第1因子に“本児が”、第2因子に“先生が”がそれぞれ比較的高い負荷量を示している。このことは、本人の氣楽さがその氣の自由な変転を可能にし、一方受けとる側の氣楽さが相手側の氣働きにある程度支えられることがあるということを示すものと考えられる。

次に第4因子では“氣が強い”“氣が弱い”“氣が小さい”が主要な表現としてあげられる。これらは第1因子でみたように、氣を主語として実体化しその性状を述べる表現群であるが、ここでの性状は身体と氣の比喩関係

によって捉えられると思われる。つまり体力や腕力の強さが氣力の強さへと移行し、身体の小さいことは体力の弱さと関係づけられ、“氣が小さい”は“氣が弱い”に通ずるようになるのである。青木(1973)によると“氣が小さい”は“肝のすわた”“太腹な”の反意語としてあげられており、ここでも身体の隠喩が関わっている。身体の隠喩も氣の隠喩も、ここではパーソナリティの側面としてそのエネルギー量を示していると思われる。

最後に性差についてみておきたい。まず第1因子では男子が女子よりも正方向群に多い。このことは6歳児では男子が女子に比べよりものごとへの関心が移ろいやすく、変転しやすいということを示していると考えられる。もしくは、そのように先生に映っているとも言えるだろう。また、第4因子では男子が女子に比べ氣のエネルギー量の少ないものとして選ばれることが多いことを示している。このことからこの時期の子どもは女子がより氣が強くしっかりして見られるのだと考えられよう。しかし、それよりも興味深いのは、第1因子、第4因子が他の因子に比べ性差を表わしやすいということである。第1因子、第4因子に見られる氣は、氣を個体の中にある1つの物質的なものとして捉えその性状を表現するものであった。従って、これらは身体的差異と隠喩的に結びつきやすく、性差をもたらしやすい因子だと考えられる。

以上、氣という言葉記号によるパーソナリティの分節構造を因子分析によって得られた4因子をもとに検討してきた。しかし、氣が1つの言語記号である以上、分析的に捉えられたこれら4つの因子も別々に独立しているというよりは、常にからまり合い、ずれ合っていくものであろう。また、本研究の展望として臨床面接場面での応用を念頭においたのも、第3因子において考察したように氣が対人関係の場において二者にまたがり、二者をつなぐ観点をもたらししてくれるのではないかとということろにあった。そして転移、逆転移などの記述用語として氣は検討に値するものであると思われ、今後その研究が必要となるであろう。

要 約

日本語の氣は、われわれが日常会話でよく用いる言葉であり、パーソナリティを表現する際にも使われる。氣という言葉は多義の意味空間を有し、その隠喩的な使い方によってパーソナリティの特性から状態にわたって種種の表現を可能にしている。本研究ではパーソナリティの特性記述に焦点をあて、そこで用いられる氣の性格表現が捉えるパーソナリティの分節構造を因子分析を用いて明らかにし、4因子に分けてその検討を行った。

1. 氣を視覚的、触覚的に捉えられる性状・運動をも

つものとして人格の一側面を隠喩的に表現する群である。その際気は本質的に変転しやすいという前提がある。

2. 気を操作の対象として捉える隠喩が働く群である。ここでは対人関係での注意の働かせ方に焦点があり、気働きの因子と総称できよう。

3. 気を、対人関係における関係そのものを表わす波長として捉える隠喩の働いている群である。

4. 気が身体との比喩関係に支えられ、主語として実体化し、そのエネルギー量が焦点となる表現群である。

また第1因子、第4因子は気を実体化して捉えやすい表現群であり、従って身体的差異の隠喩に結びつきやすく性差を示しやすいものであることが明らかにされた。

最後に第3因子に特徴的に示されるように、気の性格表現は対人関係を前提に用いられるものであり、臨床面接場面での臨床像記述における有用性を示すものと考えられ、今後の研究の方向性が示唆された。

引用文献

- 赤塚行雄 1974 気の構造 講談社
Allport, G. W., & Odbert, H. S. 1936 Trait names : A psycho-lexical study. *Psychological Monographs*, 47, 1-37.
青木孝悦 1971a 性格表現用語の心理-辞典的研究——455語の選択、分類および望ましさの評定—— 心理学研究, 42, 1-13.
青木孝悦 1971b 性格表現用語における個人的望ましさの因子分析的研究 心理学研究, 42, 87-91.
青木孝悦 1972 性格表現用語580語の意味類似による多因子解析から作られた性格の側面 心理学研究,

43, 125-136.

- 青木孝悦 1973 性格側面57についての2,3の研究——反意語、言い換え語、特性所有のタイプ—— 千葉大学 人文研究, 2, 35-58.
青木孝悦 1976 多数の性格領域から得られた性格構造 心理学研究, 47, 239-249.
青木孝悦 1979 性格表現用語とパーソナリティの評定 心理学評論, 22, 367-383.
千葉胤成 1963 無意識の心理学 協同出版
土居健郎 1971 甘えの構造 弘文堂
波多野完治 1975 子どもの認識と感情 岩波書店
市川 浩 1978 身の構造 田島節夫他(編) 講座現代の哲学2 人称の世界 弘文堂 Pp.105-175.
木村 敏 1969 自覚の精神病理 紀伊國屋書店
木村 敏 1972 人と人との間 弘文堂
木村 敏 1981 自己・あいだ・時間 弘文堂
レイコフ G・ジョンソン M. 渡辺昇一・楠瀬淳三・下谷和幸(訳) 1986 レトリックと人生 大修館書店 (Lakoff, G., & Johnson, M. 1980 *Metaphors we live by*. Chicago : University of Chicago Press.)
中井正一 1947 気(け, き)の日本語としての変遷 帝国学術院紀事, 5, 18-36.
大野 晋 1974 日本語をさかのぼる 岩波書店
佐藤幸治 1944 気の人間技術学 哲学研究, 29, 26-53.
佐藤幸治 1961 心理学全書 11 人格心理学 創元社
梅本堯夫 1981 人格の構造とその実験による変容 浜治世(編) 現代基礎心理学8 動機・情緒・人格 東京大学出版会 Pp.185-197.

——1986.9.16. 受稿, 1987.7.11. 受理——